

聖書：Ⅱペテロ 1：12～18

説教題：主イエス・キリストの力と来臨

日時：2018年2月11日（朝拝）

今日の箇所は大きく2つの部分からなっています。12～15節までと16～18節までです。前半でペテロは、この手紙を書いた目的について記しています。ここで繰り返して来て良く目に留まる言葉は何でしょうか。それは「思い起こす」という言葉です（12、13、15節）。ペテロは12節で、この手紙の受取人たちは自分が今書いていることをすでに知っていると言います。またその真理に堅く立っているとも言います。であるなら同じことをもう一度書く必要はないのではないのでしょうか。しかしそうでないとペテロは言います。「私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです」と。ここにキリスト教信仰における「思い起こす」ことの大切さが教えられています。なぜすでに知っていることをもう一度思い起こす必要があるのでしょうか。それは私たちが忘れやすい人間だからでしょうか。それもあると思います。もし一度聞いて全部自分のものにする事ができるなら、同じことをもう一度言ってもらう必要はなくなります。しかし残念ながら私たちはそうではありません。一度分かったと思っても時間が経つと忘れてしまいます。前に聞いたことでも、だんだんその重要性が頭の中でぼやけて来るということが起こります。ですからたとえ前に聞いたことでも、もう一度改めて聞いて、それを自分の中で新しいものにする、より深いものにするということが私たちには必要になります。

しかしここで私たちが思い巡らすべきは単に私たちの弱さのことだけではないと思います。「思い起こす」という言葉は、もう一つ大事なことを私たちに教えてくれます。それは私たちは何か新しいものを求めてさまよい歩く必要はないということです。私たちが心に留めるべき神の啓示はすでに十分な形で与えられているということです。多くの方は新しいことが好きだと思います。まだ聞いたことがないような話だと私たちは目を覚まして喜んで耳を傾けますが、前に聞いたことがある話だと思ふと突然興味を失ってしまいます。そのためキリスト教に関しても何か新しい話、新しい教えがあると聞くと、そちらの方へ飛んで行きたくなってしまいます。しかしそうする必要はない。なぜなら信ずべき真理は十分な形ですでに与えられているからです。私たちが拠って立つべき真理はイエス・キリストにおいて決定的かつ最終的に示されたからです。ヘブル人への手紙 1章 1～2節：「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、

また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」 このイエス・キリストにおける啓示に付け加えるべきものはありません。ですから私たちは新しいものを求めてさまようべきではないのです。大切なことは、すでに伝えられた教えを思い起こすこと。それをもう一度新しくしっかり握り直すことです。そのことによって私たちは奮い立たせられると13節で述べられています。もしそうになっていないなら、それは新しい教えが足りないからではなく、すでに聞いた教えを十分に思い起こしていないからと言えます。私たちはイエス・キリストの福音に何度でも聞き、これを思い起こすことによって奮い立たせられて、主の救いの道を前進して行きたいと思います。

このこととセットでここで特徴的なことはペテロの献身です。彼は自分の死が近いと言っています。14節に「私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っている」とあります。主も私にはっきりお示しになったとも書かれています。これは何のことでしょうか。これはおそらくヨハネの福音書 21 章に記されているイエス様のことばのことと思われる。イエス様はペテロに三度、「わたしを愛するか」と問い、ペテロが「私があなを愛することは、あなたがご存知です」と答えた後、21 章 18 節でこう言われました。「まことに、まことに、あなたに告げます。あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたい所を歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、他の人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」 次の 19 節には「これは、ペテロがどのような死に方をして、神の栄光を現すかを示して、言われたことであった」と注釈されています。普通の人とは違う死、おそらく殉教が暗示された言葉だったと思われる。ペテロはその主の言葉を心に留めて歩んで来ました。そしてすでに「年をとると」と言われた年齢に達しています。またローマ皇帝による迫害がすでに始まっている状況もあったと思われる。その中でペテロはいよいよその日は近いと自覚していたと考えられます。

しかしここに私たちが見るのは、ペテロがその厳しい死を恐れていないことです。彼は自分の死のことを「幕屋を脱ぎ捨てる」と言っています。幕屋とはテントのことです。仮住まいのことです。つまりこの地上での一時的なテント生活を間もなく終えていよいよ永遠の都に入るということを彼は見つめていた。そしてその日まで地上における自分の使命に没頭しようとする彼の姿が示されています。ペテロは前に主イエス様から「立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」と言われていました。彼は主に感謝して、

そのように兄弟たちを力づける働きに献身しています。残りの生涯をそのためにささげようとしています。私がこの世を去った後に、「あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです」と言って、この手紙を書いています。この手紙はこのような彼の思いがこもった遺言のような手紙です。私たちはその彼の思いを思っ一層心してこの手紙に耳を傾けたいと思います。ペテロが書いてくれたことをそっちのけにして、新しい教えを求めてさまよい歩くのではなく、この手紙を通して、すでに聞いたことをもう一度新しく思い起こさせられることを通して奮い立たされ、真に幸いな道を進みたいと思います。

さてこう述べられた後、いよいよ 16 節から本論へ入ります。ペテロはここで、自分たちがこれまで知らせて来たメッセージの中で一つのことを取り上げています。それは「私たちの主イエス・キリストの力と来臨」です。イエス様が力を伴って再び地上に現れる再臨の日のことです。「それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません」と彼は言います。なぜこんなことを彼は言ったのでしょうか。それはそのような批判が反対者たちからなされていたからだと考えられます。すなわち偽教師たちのことです。その偽教師たちのことは 2 章で詳しく取り上げられます。そしてその主張が 3 章 4 節に記されていると考えられます。3 章 4 節:「キリストの来臨の約束はどこにあるのか。父祖たちが眠った時からこのかた、何事も創造の初めからのままではないか。」 彼らは「キリストの再臨などいつまで経っても起こらない。そんなものはないのだ!」とあざけていました。そうして放縦の生活、不道德な生活をしていました。さばきがないと思えばそうです。正しい生活をしなくても大丈夫。そんな彼らはペテロたちが伝える主の再臨のメッセージを作り話だと非難していたのでしょうか。そうやって聞く人々に不安を与え、恐怖を与えて、自分たちが思うような道徳的生活をさせようとしている! と。しかしそうではない! とペテロは言います。その根拠として 16~18 節では主が高い山で栄光の姿に変貌された時の出来事を指し示します。あの姿を私たちは実際に見たのだ! と彼は証します。

しかし私たちは思うかもしれません。なぜこのことなのかと。これが主の再臨とどう関係するのかと。主の再臨を論証するなら、復活のことに触れるとか、あるいはその後の昇天について触れるとか、あるいは使徒の働き 1 章に記されているように、主が天に昇って行かれる際に御使いが弟子たちに語った言葉、「なぜ天を見上げて立っているのですか。このイエスはあなたがたが見た時と同じ有様で、またおいでになります」とい

う言葉を引用する方が適切ではなかったかと。しかしこのペテロの言葉を通して改めて注目させられることは、あの高い山における主の変貌の出来事と主の再臨との間には深い関係があるということです。マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書にその記事が出て来ますが、いずれも再臨の話とセットで出て来ます。思い起こすために開いて確認して見たいと思います。まずマタイの福音書16章27節。イエス様はそこで「人の子は父の栄光を帯びて、御使いたちとともに、やがて来ようとしているのです。その時には、おのおのその行いに応じて報いをします。」と再臨の日のことを述べられます。そして次の節で「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、人の子が御国とともに来るのを見るまで決して死を味わわない人がいます」と言われました。そして次の17章1節から、高い山で御姿が変貌された時のことが記されています。次にマルコの福音書8章38節でも「人の子が父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに」来る再臨の予告がなされています。そして次の9章1節で「ここに立っている人々の中には、云々」という言葉が語られて後、2節から高い山での主の変貌の様子が記されます。もう一つルカの福音書9章26節。ここでも主の再臨の日のことが述べられた後、同じように「ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは決して死を味わわない者たちがいます」と語られて後、高い山での主の変貌の出来事が記されています。いずれの場合も、真ん中に挟まれた言葉は少し解釈の難しい言葉ですが、それをどのように理解するにせよ、主の再臨と高い山での変貌の出来事には密接な関連があるということが分かります。三福音書とも栄光の姿での主の再臨のことが述べられ、その神の国が力をもって現れるのをあなたがたは見ると言われ、そして主の変貌の出来事があった。これはどういう関係であると言うべきでしょうか。それは高い山における主の変貌は、やがての再臨の前触れであるということではないでしょうか。その予表であるということではないでしょうか。やがて栄光に包まれた主の再臨の日が来ることの確証として、高い山での変貌の出来事があったということです。やがての日を先取りする姿がそこにあったということです。

ペテロは16節で「この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです」と言っています。彼らは確かに主の威光を見ました。福音書によると、「御顔の様子は変わり」とか「御顔は太陽のように輝き」とか、その「御衣は光のように輝き」「世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった」などとあります。ペテロはそのことを指して、17節で「キリストは父なる神から誉れと栄光をお受けになった」と言っています。彼らはそこでキリストがこれまで見たこともないあまりの輝き、あまりの栄光を父なる神から

着せられている姿を目の当たりにしました。そしてその姿が変わっただけでなく、天からの声もありました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」前半の「これはわたしの愛する子」という言葉は、詩篇2篇9節から取ったものです。神がやがて遣わすまことの王について歌ったメシヤ詩篇です。つまりこのイエス・キリストこそ神が約束し、ついに遣わされたまことの王であるということです。そして後半の「わたしの喜ぶ者である」という言葉はイザヤ書42章1節から取ったものです。こちらは苦難のしもべについて歌われている言葉です。つまりキリストは神が遣わされたまことの王であるが、この方は仕えるしもべの働きを通して、すなわち十字架に至るまでの苦しみと死の生涯を通して、その働きをされる。ペテロはこの言葉をここにいて聞きました。他の使徒たちもそうでした。神はそのようにしてついに立てた王を、このようなこの上ない、この世のものとは思えない輝きで輝かせてくださっている。そして言葉によってもそのことをはっきり示された。この方はこれから十字架の道を経て永遠に治める王となられる方である。やがてその主権を明らかに現わして再び地上に来て治める王である。あの高い山での変貌は、そのことを神がはっきり示された神の啓示であったということです。

主の再臨について考える時、ペテロはいつもこのことを思い出したのでしょうか。これは彼にとって生涯忘れられない光景でした。まばゆくきらめき輝く、あの主の栄光のお姿。そのお姿を主は今度はあからさまに示して、かの日には神によって立てられた王として、この世界また宇宙を治めるために必ず来られる。そのことを私たちもペテロの証しを通して繰り返し思い起こすべきではないでしょうか。主の変貌の記事はただ何か特別なこと、不思議なことが起こったという報告ではありません。神はあそこで主イエスを栄光の王として立てておられることを、かの日を先取りするようにして使徒たちに示してくださったのです。一度目はクリスマスの時に低い、貧しい姿で来られましたが、二度目は栄光に輝く姿で来られる。神から誉れと栄光をお受けになったお方として、力をもって。私たちはこの真理に心かき立てられているでしょうか。このことに奮い立たせられているでしょうか。頭では再臨の話を知っていても、正しく思い起こしていないなら、私たちがその日はまだまだ来ないと考えて、自分の生活にそれが何の影響力も持たないことになってしまいます。むしろ偽教師たちのように、昔からこの世界はこのままだし、これからもそう簡単には変わるはずがないと考えて、自堕落な生活を肯定する者にさえなりやすい。そんな私たちにペテロは、この遺言的書簡を通して思い起こさせてくれています。主イエス・キリストは力をもって来臨される。あの高い山での変貌の

出来事は、その日が確実に来ることを示している。私たちはそのことを見たのである、と。私たちはこのメッセージを新たに心に刻んで、その日を待ち望む歩みへ導かれたいと思います。主は非常な輝きをもって来られます。その日を見据えて私たちがなすべき取り組みは、5～7節で見た徳を次々に増し加えて行く歩みです。そうしてこそ11節で言われたように、私たちはイエス・キリストの永遠の御国に入る恵みを豊かに加えられる。すでに伝えられた福音の教えを、この手紙を通して繰り返し思い起こさせられ、それによって奮い立たされて、この約束の日に目を高く上げ、その日へと向かう信仰の歩みを励まされて行きたいと思います。